

然

-ZEN-

OPEN AIR LAB 機関誌『然』Vol.1

特集

自然との共生

特集

自然との共生

帝京科学大学フィールドミュージアムOPEN AIR LABの理念「自然との共生」
ここにはどんな思いが込められているのか？

OPEN AIR LABに関わる2人の先生からお話を聞きました。

みなさんの自然との共生を考えてみてください。

写真〓丸山星砂

帝京科学大学生命環境学部
アニマルサイエンス学科教授
Open Air Lab 館長 藪田慎司先生

【経歴】 島根県浜田市出身。もともとはロケット工学がやりたかったが、ソロモンの指輪を読み、小学生の頃から観察することも好きだったので動物行動学をやろうと思った。大学の卒論でチョウチョウオウ類の研究を行い、修士、博士ともチョウチョウオウ類を研究した。帝京科学大学にはイヌの行動についての研究と教育をする人が必要と言われやってきた。



帝京科学大学生命環境学部
自然環境学科教授 篠原正典先生

【経歴】 映画「LE GRAND BLUE」に影響を受けイルカの研究を始める。小笠原のイルカを対象とした研究や閉鎖環境の実験などの経験がある。こうした経験が飼育イルカ問題やヒトと鯨類の関係を考える際にも活かされている。

Q・自然との共生とは

A・私たちヒトは、自分自身の六十兆の細胞だけでなく、共に生きる微生物の百兆とも言われる細胞から成る。これらと共に、例えばこの部屋の大気やこの机のような事物に触れたり、ときには草木や動物などに触れたりしながら私たちは生きている。イルカやシャチも、生きていくうえで海水やいろいろな生き物に触れる。人間もイルカもシャチも、自然や多様な生き物との繋

Q・自然との共生とは

A・自然とは我々を取り巻く環境や他の生物という「外の自然」と、我々の身体、欲望、生と死、個性といった我々の中にある「内なる自然」の2つがある。現代の世界が直面しているのは気候変動、生物多様性の減少だったリ、戦争といった問題である。気候変動と生物多様性の減少は外の自然を傷つけていて、戦争は自分らの内なる自然を傷つけている。それがどこから来たかという人間の欲望や感情といった「内なる自然」が起こしているものである。自分自身で自分自身を食ってしまうこのような現象はどうなっているんだろうということを考えなんとかしていかうとするのが「自然との共生」である。そこには「調和」と同時に「折り合い」をつけるという意味もある。

がりを切ってしまったら生きられないだろう。人間が自然と共生していくには教育が大事だ。「自然は大切」、「自然はおもしろい」ということを伝えていくには、専門家や前線にいる人だけが頑張るのではなく、自然が好きな大人を育てることも大切である。



Q・海と上手に関わるには

A・海は広くて強いと思うている人は多いだろうが、人間の方が強くて影響力がある。海から無限に資源を得られるという考えを改めないといけない。

Q・ブリコラに対する思い

A・作ってきた人の思いを知ってほしい。デザイナーの清水さんと岡部さん、上野原の棟梁の梶原さん、建築士の堂本さんたちです。ブリコラではペットボトルが禁止されているが、何かが制約されているから気づきがあるということも大切だと思う。

Q・身近な自然との共生とは

A・五感を使って楽しんで欲しい。音に意識を向けたり、暗い夜空を見上げたりするのもよい。あと、せっかく山の国にいるのだから山に行つてほしい。みんな謎に東京に行きたがる。理由を聞くと東京には何でもあると言う。だがこつちには緑がある、川がある。おいしい野菜がある。山がある。夜空がある。みなさんいいところにいるのだから、たくさん楽しんで欲しい。

取材、写真＝丸山星砂

海の生き物を資源として考えたときに、今はこの生き物を獲っているけど、いなくなったら違う生き物を獲ればいいのかという考え方は良くない。そのような獲り方では、その海域の個体群はいなくなってしまう。海を守りたいなら「海は脆弱だ」という意識を持つことが大事だ。

Q・ブリコラに対する思い

A・大学のなかで学生がくつろげる場所のうちのひとつになっていると思う。ブリコラではパソコンを広げてもいいし、コーヒーを飲んでもいいし、お弁当を食べてもいい。標本や剥製に囲まれた空間でたくさん時間を過ごし、自身の興味の幅を広げてもらいたい。学生にとっても教職員にとっても、ブリコラが一層心ほじける場所になってほしいと思っている。

取材＝宮崎愛梨 写真＝丸山星砂

八重山フィールドワーク で観察した生物

ハクセキレイ

ムササビ

タゴガエル

ジムグリ

サワガニ

ミミガタ
テンナンショウ

～フィールドノート～

3月30日(日)

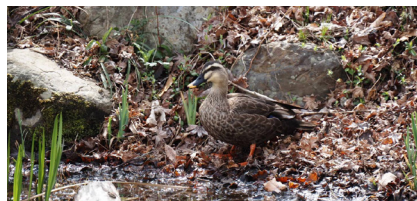
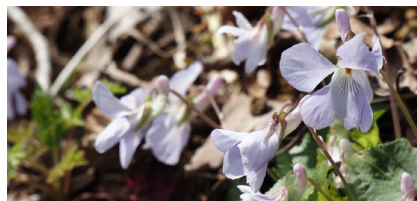
場所…東京西キャンパス内

西東京工業団地内

カメラの使い方や生物観察の方法を確認しながら散策した。

【観察した生物】

目 視 カルガモ・スマレの一種・モクレン・サクラ
鳴き声 カケス・ウグイス



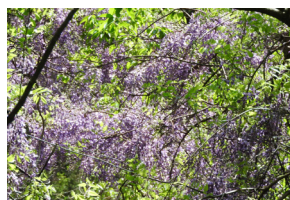
4月29日(火・祝)

場所…八重山

鳥類観察を目的に実施。鳥類の他に繁殖期のタゴガエルの鳴き声がいたる所から聞こえた。

【観察した生物】

目 視 ヒガシニホントカゲ・ニホンカナヘビ・タゴガエル・ジムグリ・ヒヨドリ・シジュウカラ・コムスジ・ホソミオツネン・オオスズメバチ・サワガニ
鳴き声 センダイムシクイ・カケス・ツツドリ



5月21日(水)

場所…八幡神社(大学裏)

ムササビの観察を目的に実施。3頭のムササビが観察できた。また1頭は小さかったので親子なのかもしれない。

【観察した生物】

目 視 ムササビ・ジグモの巣
鳴き声 アオバズク





【表紙解説】

大学ビオトープ池で撮影したアズマヒキガエル（オス）です。後ろには彼らの繁殖を見守る人達が写っています。例年、アズマヒキガエルは3月中旬から4月上旬頃の内、数日間だけビオトープ池に集まり繁殖を行います。今年は4月7日から11日までの5日間確認できました。この短い期間に20頭以上のアズマヒキガエルが集まり、オスたちが数少ないメスを奪い合う「ガマ合戦」を行います。カエル好きにとっては毎年見逃すことができない数日間です。写真、解説＝松本祐樹

ブリコラ
イベント情報

ブリコラにきた蛾、略して

ブリコラ展

ブリコラの壁面で観察した200種以上のガ類を紹介する展示をしています。

会場：ブリコラ奥展示スペース

開催時期：10月上旬まで



機関誌『然』とは？

学生が OPEN AIR LAB の一員として編集し発行する小冊子です。「然」とは「自然」や「天然」などで使われる字であり、一文字だけだと「そのまま・そのとおり」といった意味を持つ言葉です。本誌は毎回テーマを設定し取材、観察を行います。この取材活動で得られた経験を「そのまま」冊子に掲載し発信していくことで、OPEN AIR LAB の活動や帝京科学大学、周辺地域の魅力をお伝えしていきます。

ご意見、ご感想については、右記 QR コードよりお問い合わせください。



帝京科学大学 東京西キャンパス

OPEN AIR LAB